

〔島根女子短期大学紀要 Vol. 29, 33～45(1991)〕

# 女性の生活とライフスタイル構成要因との かかわりに関する研究 (第1報) —— 生活意識を中心として ——

磯 部 美 津 子  
(家庭経営学研究室)

Studies on Women's Life and Lifestyle Component (Part 1)  
—— Living Sense ——

Mitsuko ISOBE

## 1. 緒 言

1984年に女性の雇用者が家事専業者を2万人上回って以来その差は年々拡大しており、1988年には雇用者が家事専業者を137万人も上回った。このことは1986年4月に施行された男女機会均等法の波及効果<sup>1)</sup>によるところが大きいといわれる。

また、1989年3月の4年制大学及び短大の卒業生の就職状況を見ると就職希望者数が243,002人<sup>2)</sup>になり始めて女子が男子を上回った。高学歴女性の職場進出で仕事の内容も旧来の『補助労働』から『自律的な判断の要求される仕事』に変化してきている<sup>3)</sup>。

家庭生活では夫の家事労働が『補助労働』から『役割分担した労働』に定着されつつある様だが『主婦の仕事』が代替えできるまでには至っていない。こうした家事労働に企業が目をつけ、家事代行、総菜提供などの形で社会化したことにより、『家事が仕事である』という認識がより明確になった。

このように女性は『職業における役割分業』と『家庭内における役割分業』の2つの分業をこなさなければならなくなった。しかも女性自身みずからの生活目標・価値観をもち、生活設計に基づいた多忙な時間から自由時間を生み出し、楽しみや生きがいのために費やし行動するケースが団塊の世代以降の若

年層を中心に増加している<sup>4)</sup>。

島根においても1987年の女性の就業者は18万人で家事専業者9.9万人を8.1万人上回っている。このことは働く女性の増加の問題のみでなく女性の意識や生活環境の変化に伴う子供の問題、老人介護の問題など新たな問題を生み出している。

そこで、このような状況の中で働く女性をめぐる問題を“働く”女性のみの問題としてではなく、島根に居住し生活する女性全体の問題として捉え、対応していくための基本的資料を得る目的で調査を行った。検討は対象者の動向を『人間としての生活』と『職業人としての生活』に別けて、次に記述するライフスタイルの分類から検証を行った。

今回はそれらのうち生活意識、特に主観的知覚や認知の部分について報告しようとするものである。

## 2. 概念規定

ライフスタイルと生活の関係を考えるにあたって、ライフスタイルに焦点をあて、これまでどのように捉えられてきたか、あらためて確認し明確にすることで新しい展開を準備することとなる。

### 1) ライフスタイル

ライフスタイルの語は、元来社会学や心理学の分

野で、人びとの意識や行動様式の集团的・階層的な差異を包括的に表現する複合的な概念として、あるいは個人の様々のレベルに分析拠点を置いた捉え方の手法として用いられてきた。また、1960年以降のマーケティング分野で盛んに用いられるようになったライフスタイル分析の内実は経済的・心理的・社会的・文化的領域から生活を総合的に、消費者を多面的に捉えようとする試みである。家政学分野においては、理論的にも経験的にも首尾一貫した形で展開されてきていないため、態度・期待・価値観などの心理的変数だけを取り入れてライフスタイル分析を行うなど研究者によって様々な捉われ方がされてきた。これらのうち衣・食の個人領域<sup>6)</sup>で、消費者行動の側面に焦点を向けた井関ら、中川などが実証的研究から検討を加えその有効性——「生活システム」アプローチの技法の中で人口学的要因や社会経済的要因による説明力よりライフスタイル・セグメンテーションの説明力が上回ることを示したライフスタイルの捉え方は、本項で「職業人としての生活」と「人間としての生活」の中でどのような意識を持ち、またそれぞれの生活における女性の意識や価値観にどのような影響を与えているか、という問題を解明するための方法として有用であると考えた。そこで井関らの方法に学んで表1に示すようにライフスタイルを生活意識、生活構造、生活行動の次元から構成されるパターン化したシステムと捉える。ライフスタイル概念としては、生活意識では主観的知覚・認知や情報とイメージなど心理学的諸要素を、生活構造では財や資産の保有状況などを、生活行動はシステムの顕在化したパフォーマンスを考

える。そしてライフスタイル構成要因として井関らの分類方法<sup>8)</sup>に学んで「職業人としての生活」の場面では「資格」「従事年齢」「生活設計」「生活の力点」「働く理由」「生き方のパターン」「職業選択状況」「コンピュータへの適応」など、「人間としての生活」の場面では「家庭のイメージ」「家族関係」「近隣関係」「生活に対する不安」「老後生活に対する不安」「他人の暮らし方との比較」「暮らしの願望」「所持品」「今後の生活」「生活のパターン」「生活の力点」「家庭運営」などとした。

## 2) 人間としての生活と職業人としての生活

表1に示す「人間としての生活」と「職業人としての生活」とは全体と部分との関係にあり、共に①自分の生活を維持し、またより豊かにするために意識的にエネルギーを消費している、②人—人関係、人—ココロ関係、人—コト関係、人—モノ関係のバランスをとること、をもつと考えられる。このことに関連し、直井らは「日々の仕事での経験がその人の意識や価値観に影響を与える」とゴーゴリの「外套」から示しているが、その中でどのような側面のどのような意識に影響を与えるかの点については必ずしも明らかにされていない。そこで著者は、女性が就労することで価値観に徐々にではあるが構造的な変容をもたらすと考え、1人の対象者の生活を「人間としての生活」とその一部である「職業人としての生活」に分けることで、「職業人としての生活」の「人間としての生活」への影響を包括的・総合的に捉えられると考える。

## 3. 研究方法

就労女性の「人間としての生活」と「職業人としての生活」を総合的・包括的に捉えるためにライフスタイル構成要因との関連から、①生活を取りまく環境の変化のなかで、情報やイメージの組み込みを学習することで、生活意識や消費態度を形成しているか、②日々の生活課題を解決するプロセスにおいて、様々な事象を主観的に知覚し認知することで価値・態度・活動のパターンをつくりだして

表1 分析枠組み

システム	生活区分	人間としての生活	職業人としての生活
	側面		
生活意識	認知的・学習的	1. 主観的知覚や認知 ・価値意識 ・生活目標 ・消費、購買意識 2. 情報、イメージの組込 ・価値意識 ・態度形成	1. 主観的知覚や認知 ・価値意識 ・生活目標 ・消費、購買意識 2. 情報、イメージの組込 ・価値意識 ・態度形成
生活構造	ストック的	1. インプット ・習慣 ・保有	1. インプット ・習慣 ・保有
生活行動	欲求	1. パフォーマンス ・コントロール ・バランス	1. パフォーマンス ・コントロール ・バランス

いるか、③「生活のシステム」アプローチは同じ社会、文化的状況にある女性の生活を全体的・平均的に捉えるものであるため個々人の価値観がそのまま現れるものではないが、平均的な生活者の状態からそれを構成するライフスタイル要因を理解・把握できるか、の視点に分けて考えることとする。

## 1) 調査

### (1) 対象

対象は「職業人としての生活」の経験がその人の意識や価値観に影響を与えられることから就労者と未就労者に分けて選定した。就労者の対象は人口規模別、職業別にわけ、事業所名鑑および該当機関・組織の情報により選定した。また未就労者は就職をま近に控えた松江、出雲の短大生、専門学校生、職業高校生を対象にした。その結果、就労者として15歳以上67歳以下の743名(平均年齢40.6歳)、そのうち既婚就労者は606名、未婚就労者は137名の回収(回収率84.5%)を得た。未就労者は職業高校生に20%の男子生徒を含むが、607名(平均年齢19.03歳)の回収(回収率82.4%)を得た。

### (2) 調査時期と方法

配票調査は、該当機関および組織の協力を得て、平成元年10月6日より11月8日までの間に配付回収

した。

### (3) 調査内容

調査は表2に示すようなライフスタイル特性と「人間としての生活」と「職業人としての生活」の関連を明らかにするための質問事項を定めた。

「職業人としての生活」を捉えるにあたっては、職業を決める最も大きな動機を『技術を身につけられる』『自分の能力・資格・性格にあっている』『社会的意義』『将来性』を「積極的な動機」、『縁故・知人の勧め』『他の就職口がない』『身内の家業・事業』を「消極的な動機」、『収入が多い』『勤務時間が短い』『通勤に便利』を「条件の重視」、『職場環境』『仕事が好き』『安定』を「環境の重視」として分類した。『働きたい』と思う理由も、『やりたい仕事』『自分を高めたい』『社会とつながりを持ちたい』などを「積極派」、『小遣いのため』『家庭に閉じこもってばかりいられない』などを「消極派」、『不測の事態にそなえて』『働くべきだと思うから』などを「生活設計派」として分類した。また「生き方のパターン」では、女性の学校卒業からのライフコースを経済企画庁「女性のライフコース」<sup>11)</sup>から『1型』『2型』『4型』の非就業型、『3型』の再就業型、『5型』の継続就業型、『6型』のディンクス型、『7型』の未婚型の7つのライフコースパターンに分類した。毎日の「職業人としての生活」を振り返ってみて、『趣味を楽しんでいる』『友人・知人がいる』『平穩に送っている』『やりがいのある仕事をしている』『思うことを自由に言えたり発言できる』『やりたいことがたくさんある』と感じているか、について評定用の5段階尺度(非常に、かなり、どちらも、余り、全然)を付して主観的判断を求めた。すなわち、各段階に対して1,2,3,4,5と数値を与え被験者が印を付けた段階の値をその尺度における得点としてSemantic Differential法を用いて生活を捉えた。

「人間としての生活」では「家庭観」を「『家庭』は女性にとってどのような場と考えているのか」の視点から『任されるもの』、『創っていくもの』、『守るもの』、『入っていくもの』として捉え、『任されるもの』を「自己裁量大」、『創っていくもの』を「創造」、『守るもの』を「保守」、『入っていくもの』を「伝承」とした。「家庭運営」は『夫(父)中心』、『妻(母)中心』、『夫婦(両親)中心』、『子供中心』の視点から捉えた。

さらにそれぞれの生活を包括的・総合的に捉える

表2 ライフスタイル要因群と質問事項

生活区分 要因	人間としての生活	職業人としての生活
主観的知覚・認知情報イメージの組込	生活の力点、生活設計、暮らしぶり、充実感、好み、生き方のパターン、家庭のイメージ、女性の魅力、今後の暮らし方、情報授受、情報整理	職業選択、資格、従事年齢、働く理由、コンピュータへの適応、能力発揮、転職意向、生活設計、暮らしぶり、充実感、女性の魅力、情報授受、情報整理
	購買行動、意思決定、外食機会、インスタント食品への意見	購買行動、意思決定、インスタント食品利用、外食状況、外食の変化
インプット	住居、生活習慣、耐久消費財、預貯金、夫婦関係、主導権	生活習慣、資格、年収
パマフンオス	居住地域、結婚期間、子供の数、家族構成	共働きの条件、勤務先、就業期間、就業初め、就業時間

にあたっては林式数量化理論の第Ⅱ類と第Ⅲ類を用い、調査項目をアイテム、選択肢をカテゴリーとした。なおカテゴリーについては適切な構造図が得られるような選択した。分析において第Ⅱ類と第Ⅲ類共、アイテム、カテゴリーはほとんど同じであるが、第Ⅲ類をもちいた生活とライフスタイル構成要因との関連ではアイテムに「女性の魅力」、「充実感を感じる時」、「人間としての生活の中で感じることを」を加えた。「女性の魅力」の中の「人間としての生活」場面におけるカテゴリーとして『夫や男性に尽くす姿』『家事に打ち込む姿』『家庭を守る姿』『育児に打ち込む姿』を、「職業人としての生活」場面のカテゴリーとして『家庭を持ちつつ働く姿』『仕事に打ち込む姿』『男性と肩を並べて仕事をする姿』を用いた。「充実感を感じる時」のカテゴリーは『仕事に打ち込んでいるとき』『休養しているとき』『家族団樂のとき』『勉強や教養を身に着けているとき』『友人・知人とあって談笑しているとき』『趣味・スポーツに熱中している時』など、「人間としての生活の中で感じることを」のカテゴリーは『やりがいがある仕事』『自由に言えたり自由に振る舞える』『やってみ

たいこと、やらなければならないことがいろいろあつて楽しい』『家族が仲良く暮らしている』『近所の人達と助け合つて暮らしている』などを用いた。

#### 4. 結果および考察

##### 1) 基本的属性

意識の根底にある『価値観』は生まれ育った時代や環境のなかで、経てきた体験や周りの人から受けた影響などから形成され、安定して変化しにくいものであるが、個人のライフヒストリーにおける結婚や離婚、親や子供の死などのストレスが生活変化に重みを与え、その評点の高いもの<sup>13)</sup>によって『価値観』は変化するといわれている。また価値観は本人で<sup>14)</sup>すらわからない場合が多いが、その人の行動や意見のベースになっていて、物事を判断する『態度』の形で表出されるといわれる。その『価値観の根元』に影響を与えていると思われる基本的属性についてみることにする。

##### (1) 生活の背景

###### a 就労者について

既婚女性が職業継続を考えると『職業労働か』

『家事労働か』という女性特有の問題が介在する。そこには対象者の『価値観に結び付いた性格特性』ばかりでなく日常生活の客観的な環境条件も影響を及

表3 就労者の職種

(%)

分類 区分	家業	事業 経営	パート	内職	農・ 漁業	建設業	製造 食料	製造 繊維	製造 化学	製造 機械	サー ビス	公務員	その他
未婚	0.8	—	—	—	4.9	0.8	9.8	6.5	—	—	30.9	17.9	28.5
既婚	—	1.4	1.0	0.5	6.2	2.1	12.2	12.2	0.2	3.6	19.5	19.7	21.4

表6 既婚就労者の結婚年数

(%)

区分 項目	5年 未満	5年以上 10年未満	10年以上 15年未満	15年以上 20年未満	25年以上 30年未満	30年以上 35年未満	35年以上 40年未満	40年 以上	不明
既婚者	11.7	12.4	17.1	21.3	15.9	11.4	6.9	2.9	0.3

表4 就労者の学歴

(%)

分類 区分	中学 卒業	高校 卒業	専門 各種	短大 高専	大学 卒業
未婚	7.0	55.8	15.5	11.6	10.1
既婚	18.8	51.3	14.1	10.9	4.9

表9 既婚就労者の子供の状態

(N=627, MA, %)

分類 項目	保育園 以前	保育園	幼稚園	小学校	中・高校	以外の 学校	働いて いる
既婚者	18.0	25.7	22.2	43.1	49.1	29.7	43.9

表5 父(夫)の学歴

(%)

分類 区分	中学	高校	専門 各種	短大 高専	大学	大学院	不明
未婚者	27.8	48.6	3.3	0.8	7.8	0.5	11.2
既婚者	19.2	42.1	7.8	2.0	16.0	0.7	12.1

表10 就労者の住居形態

(%)

種類 項目	持ち家 一戸建	持ち家 マンション	公営 住宅	社宅	民間 借家	その他	不明
就労者	84.8	1.5	3.0	2.4	4.6	0.3	3.5

表7 就労者の家族構成

(%)

区分 項目	夫婦 のみ	両親と 夫婦	夫婦と 子供	三世代	両親と 本人	子供と 本人	一人
就労者	10.9	6.6	26.9	48.3	5.3	1.7	0.3

表11 就労者のローンの返済状況

(%)

区分 状況	住 宅		大 型 消 費 財		そ の 他	
	返済中	していない	返済中	していない	返済中	していない
未 婚	30.4	69.6	58.1	41.9	27.0	73.0
既 婚	43.0	57.0	51.5	48.5	20.8	79.2

表8 既婚就労者の子供の数

(%)

数 項目	なし	1人	2人	3人	4人以上
既婚者	9.8	16.7	50.1	21.0	2.5

表12 未就労者の在籍学校 (%)

分類 項目	高 校	専門学校	短 大
未就労者	15.5	27.3	57.2

表13 未就労者の母親の職業 (%)

区分 項目	未就労(16.6)		就 労 (83.4)									
	元職業 従事	職業経 験なし	内職	パート	事務	自営	家業	農漁業	建設業	製造 食料	製造 繊維	その他
未就労者	14.1	2.5	3.5	19.0	38.9	8.7	11.0	0.8	0.2	0.3	0.7	0.3

表14 未就労者の続柄 (%)

区分 項目	長 男	次 男	長 女	次 女	三女以下	不 明
未就労者	2.1	2.0	67.0	23.6	4.4	0.8

表15 未就労者の兄弟姉妹数 (%)

人数 項目	0人	1人	2人	3人	4人	4人以上	不明
未就労者	3.8	4.1	50.1	36.1	3.9	1.5	0.5

表16 未就労者の同居状況 (%)

区分 項目	親	親以外 家族	友人	夫(妻) 子	一人	その他	不明
未就労者	43.4	6.3	34.7	0.2	15.1	0.2	0.1

表19 就労者の金融資産のストック状況 (%)

分類 区分	毎 月 一定額	毎 月 不定額	余裕が ある時	ボー ナス	その他	して ない
未 婚	68.1	13.3	11.1	—	1.5	5.9
既 婚	71.3	12.2	13.0	0.7	1.2	1.7

表17 就労者の手取り年収 (%)

区分 項目	100万 未満	100万 位	200万 位	300万 位	400万 位	500万 以上	不明
就労者	17.1	22.0	24.0	27.5	5.4	1.7	2.3

表21 就労者の年金加入状況(%)

分類 区分	企業 年金	個人 年金	特 に なし	NA
未 婚	19.0	17.5	51.1	12.4
既 婚	13.9	29.9	49.2	7.1

表18 就労者の1カ月の生活費 (%)

分類 区分	10万円 未満	10~14 万円	15~19 万円	20~24 万円	25~29 万円	30~34 万円	35~39 万円	40万円 以上	DK	NA
未 婚	16.8	21.2	13.9	5.8	4.4	1.5	0.7	0.7	30.7	4.4
既 婚	11.7	19.8	26.7	16.8	10.1	5.9	2.1	1.0	3.8	2.0

表20 就労者の金融資産のストックの目的

(N=725, MA, %)

分類 項目	住宅土 地購入	大型消 費財	レジャー	子供 教育	子(本人) 結婚資金	老後 生活	不測 事態	投資	資格取 得資金	目的 なし	不明
就 労 者	12.0	32.1	25.7	19.7	19.2	17.8	17.2	8.8	10.1	42.2	1.2

表22 就労者の就業時間 (%)

区分 項目	5時間 未満	6時間 位	7時間 位	8時間 位	9時間 位	10時間 位	10時間 以上	その他
就 労 者	3.2	4.0	8.8	59.2	15.6	6.5	1.8	0.9

表23 就労者の就業期間 (%)

区分 項目	4.5年未満	4.5年以上 9年未満	9年以上 13.5年未満	13.5年以上 18年未満	18年以上 22.5年未満	22.5年以上 27年未満	27年以上 31.5年未満	31.5年以上 36年未満	36年以上 40.5年未満	40.5年 以上
就 労 者	27.2	20.6	13.6	13.5	10.9	5.8	4.5	2.6	1.0	0.3

では三世帯世帯が48.3%と多い。住居形態で一戸建て持ち家が84.8%の結果は調査地域特性である。

b 未就労者について

未就労者の在籍学校は表12、母の就労と職種は表13、続柄・兄弟姉妹の数・同居状況は表14, 15, 16に示す通りである。母親の就労が83.4%と多かったのは表9に示す

ばすと思われる。就労者の職種は表3、学歴は表4、夫(父)の学歴は表5、結婚年数は表6、家族構成は表7、子供の数と状態は表8、表9、住居形態とローンの関わりは表10、表11に示す通りである。既婚就労者の業種において繊維関係、食品関係の製造に携わっている人が24.4%、サービス業19.5%、公務員19.7%であり、未婚就労者では製造関係が16.3%、サービス業30.9%、公務員17.9%であった。未婚就労者ではサービス業が多かったが、これは職業従事形態の現状を反映したものである。世帯類型

就労者の子供の状態とよく対応する結果となった。また続柄で長女が%, 兄弟姉妹数, 2人が1/2であった。

(2) 就労者の経済面中心にみる職業人としての生活  
女性の労働を家計構造から見ると『生計の中心的担い手』か『家計補助』かで大きく区別できる。この場合『生計の中心的担い手』といえども、自らの生活と扶養家族を支えるには賃金が低すぎるという厳しい現実にあるもの、『家計補助』では夫の扶養家族の域をでない者、経済的自立を達成している者

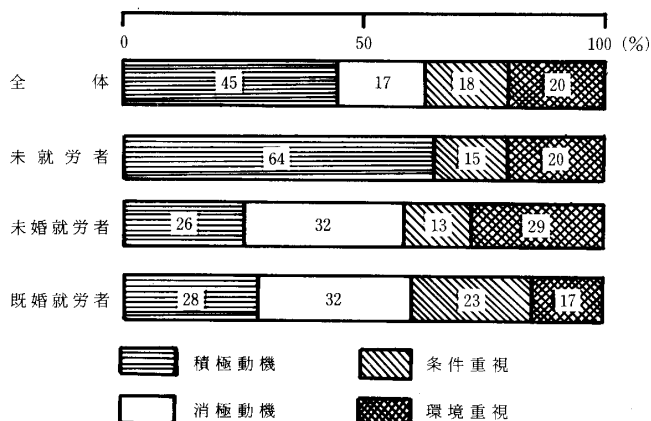


図1 職業選択の状況について

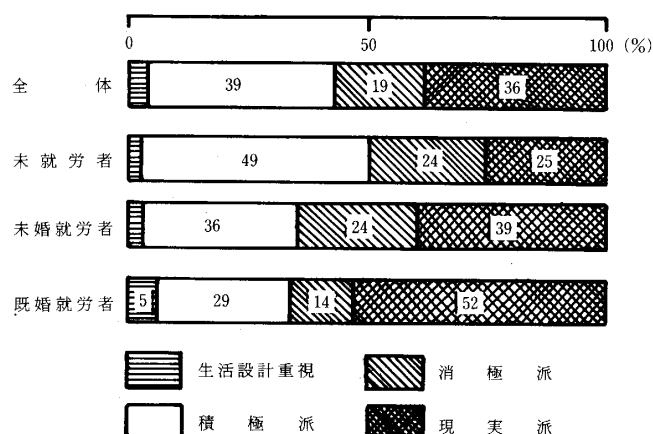


図2 就労の理由について

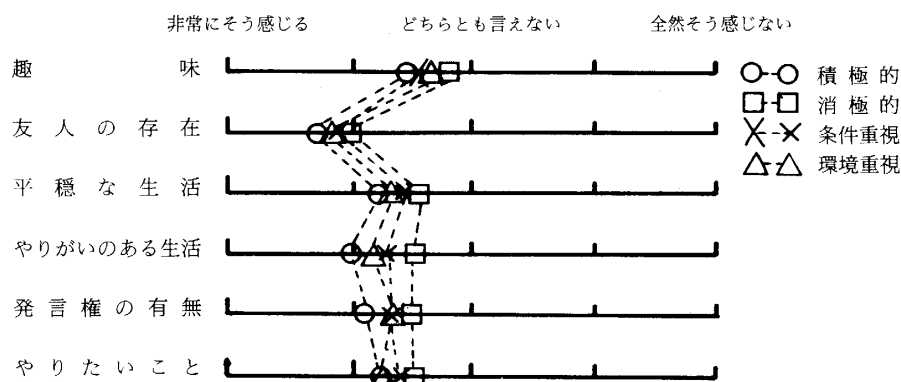


図3 職業選択動機からみた既婚者の職業人生活

と内実は様々である。就労者の手取り年収は表17, 1ヵ月の生活費は表18, 金融資産のストック状況と目的は表19, 表20, 年金加入状況は表21に示す通りである。また表22, 23, は就労者の就業時間・就業期間等の周辺環境を示すが, 就労時間は「8～9時間」74.8%, 就業期間は「4.5年」27.2%, 「9年未満」20.6%であり, 経済的自立を果しているものは僅かであると思われる。

## 2) 職業人としての生活

### (1) 職業選択動機

職業を決める最も大きな動機について, 「積極的な動機」「消極的な動機」「条件の重視」「環境の重視」に分けて比較して結果は図1に示す通りである。全体では「積極的な動機」が47%と多い。とくに未就労者が多い。既婚就労者では「消極的な動機」が32%, 「積極的な動機」28%, 「条件を重視」23%であった。それぞれの置かれている現在の立場を反映した結果となった。

### (2) 働きたい理由

現実には『働いている』『働いていない』はともかくとして『働きたい』と思う理由について, 「積極派」・「消極派」・「生活設計派」・「現実派」に分類し比較した結果は図2に示す通りである。全体では「積極派」39%, 「現実派」38%であった。就労の別でみると, 既婚就労者では「現実派」が52%, 「積極派」29%で

あるが, 未就労者では「積極派」が49%, 「現実派」25%となった。また未婚就労者は両者の中間的存在であった。これらはそれぞれの生活環境を反映したものと思われる。

### (3) 職業選択動機や就労理由からみた職業人としての生活

#### a 生活状況について

「職業人としての生活」の中で, 毎日の生活を振り返ってみて, 『趣味を楽しんでいる』『友人・知人がいる』『平穏に送っている』『やりがいのある仕事をしている』『思うことを自由に言えたり発言できる』『やりたいことがたくさんある』と感じているか, Semantic Differential法を用い, 選択動機や就労理由別に比較した。結果は図3, 図4に示す通りである。各項目における平均値は中心点である。全体として「どちらともいえない」の中心点を境にして左側に片寄っている。特に『友人の存在』が強く現れている。また選択動機における「積極的な動機」と就労理由の「積極派」はよく対応した結果を示し

表25 既婚者の就労理由の対要因別職業人の生活関連の項目比較

アイテム	区分	現実—設計	積極—消極
資 格		0.0742	0.1567
従 事 年 齢		0.1429	0.8135
職 業 選 択		0.0700	0.2462
生 活 の 力 点		0.2383	0.6365
生 活 設 計		0.2213	0.3620
生き方のパターン		0.2926	1.6437
コンピューターへの適応		0.2108	0.3346

ている。「積極的な動機」「積極派」はそれぞれの項目に対しても「職業人としての生活」の中でかなり前向きな姿勢で過ごしていると思われる。

#### b 要因の分析

「職業人としての生活」について職業選択動機の『積極的—消極的』を外的基準に、要因は表24に示すように7アイテム50カテゴリーで分析した。結果において、全て効果要因であるが、その中でも大きな効果を示しているのは「生き方のパターン」、ついで「生活設計」、「働く理由」、「資格」、「生活の力点」

であった。また要因の判別率中率は70.3%である。同じく就労理由の「現実派—設計派」を外的基準に、同じ要因について分析しその結果も表24に示す。この場合も第1位は「生き方のパターン」ついで「生活の力点」、「生活設計」であり、「資格」は0.0742と小さな値であり「現実派」の効果要因とはいいがたい。なお

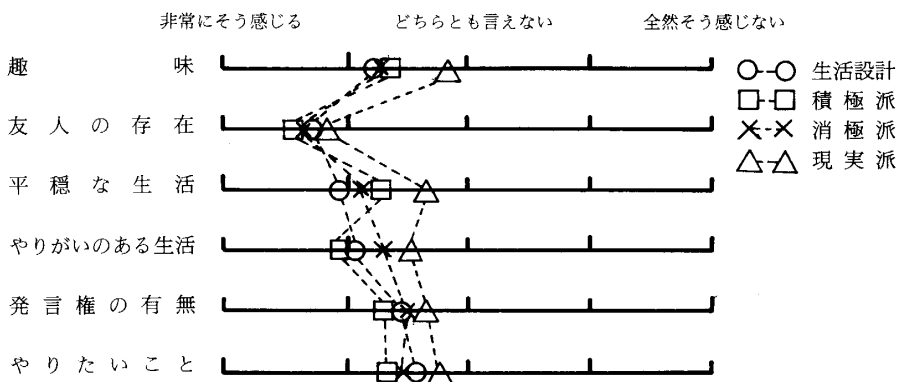


図4 就労理由からみた既婚者の職業人生活

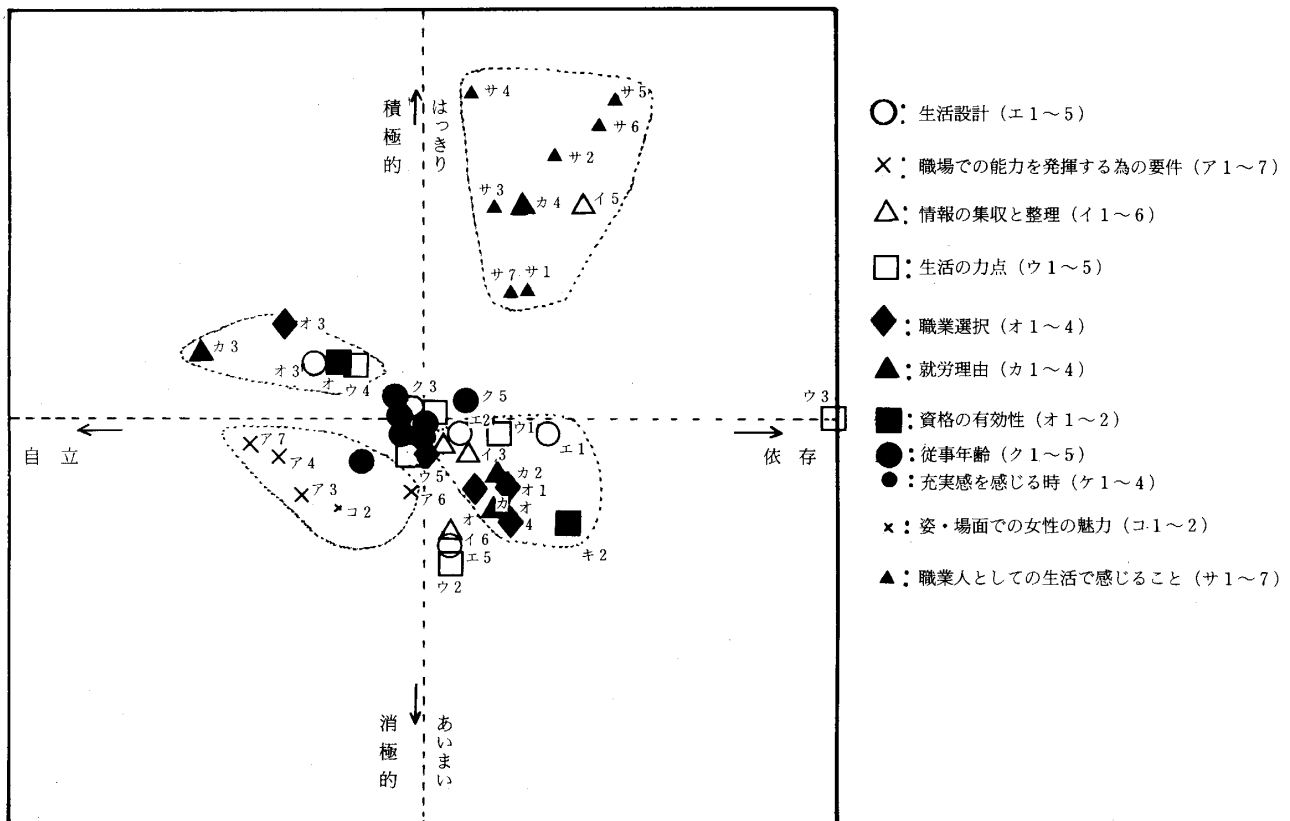


図5 職業人としての生活とライフスタイル構成要因との関連

この場合の要因の判別率の中率は74.9%である。

つぎに就労理由を『現実派-設計派』と『積極派-消極派』の2変数をそれぞれの外的基準としてレンジを求めて比較した。結果は表25に示す通りである。「積極派」はいずれの要因も大きな値を示し効果要因であることがわかった。

次にこれらの事項を総括的に捉えるために、11の質問項目、47選択肢を取り上げ、年齢の別、生活費、年収、学歴等の属性をウェイトにして分析した。その結果は図5に示す通りである。分析は2軸とした。タテ軸の固有値は0.1783, ヨコ軸は0.1456であった。中央に重なり、適

表24 就労の取組姿勢と職業人としての生活の分析

アイテム	カテゴリー	職業選択動機			就労理由		
		カテゴリースコア	レンジ	偏相関係数	カテゴリースコア	レンジ	偏相関係数
資格	直接役立っている	0.1864	0.5180	0.4355	-0.0168	0.0742	0.1075
	余り役立ってない	-0.0301			-0.0277		
	全く役立ってない	-0.3316			0.0465		
従事年齢	50歳ぐらいまで	0.0288	0.2217	0.1075	0.0349	0.1429	0.1707
	55歳ぐらいまで	-0.0194			-0.0219		
	60歳ぐらいまで	0.0205			0.0698		
	65歳ぐらいまで	-0.0824			0.0146		
	働ける限りずっと	0.0172			-0.0732		
	出産まで	-0.0549			-		
	結婚まで	-			-		
	わからない	0.0865			-		
生活設計	子供に扶養依存	-0.0284	0.6585	0.1724	0.1193	0.2213	0.2553
	年金に依存	0.0702			-0.0500		
	貯金・退職金依存	0.0576			-0.1019		
	働く	-0.0472			0.0566		
	財産収入	-0.0359			0.0336		
	その他	-0.5883			-		
	特に考えてない	-0.0850			0.1127		
生活の力点	食生活	-0.0058	0.4801	0.2023	-0.0244	0.2383	0.2212
	衣生活	-0.2915			0.1512		
	耐久消費財	-0.0059			-0.0871		
	住生活	-0.0142			0.0676		
	レジャー	0.0596			-0.0658		
	学習活動	0.1886			-0.0671		
	貯蓄	0.0392			0.0227		
	生活全般	-0.2350			-		
	精神的なもの	0.0572			0.0767		
	なし	0.0641			-0.0398		
コタへの適応	使いこなせる	-0.0642	0.1258	0.0900	0.1155	0.2108	0.1926
	学習で使える	-0.0177			0.0230		
	難しい	0.0616			-0.0431		
	使いこなせない	0.0456			-0.0954		
	わからない	-0.0219			0.0565		
働く理由	生活のため	-0.0087	0.6481	0.3282	-	-	-
	余裕がある	-0.3030			-		
	家庭外に	-0.0702			-		
	やりたい仕事	0.3451			-		
	自分を高めたい	0.1031			-		
	社会との繋がり	-0.0683			-		
	働くべき	-0.1508			-		
	不測の事態のため	-0.2909			-		
生き方のパターン	1型(非就業型)	0.2359	0.8798	0.1451	0.1614	0.2926	0.1950
	2型(非就業型)	0.0143			-0.0099		
	3型(再就業型)	-0.0204			0.0479		
	4型(非就業型)	0.0221			-0.1312		
	5型(継続就業型)	-0.0057			-0.0122		
	6型(ディンクス型)	-0.6439			-		
	7型(非結婚型)	-0.0966			-		
職況選択	積極的動機	-	-	-	0.0348	0.0700	0.0952
	消極的動機	-			-0.0351		
	条件重視	-			-0.0001		
	環境重視	-			0.0266		
					(+: 現実派, -: 生活設計派)		



度に分化した構造図は得られなかったが、近くにある選択肢同志は類似したものが来ている。最も回答の左右のふれの大きいのは「生活の力点」と「従事年齢」である。これによると「職業人としての生活」についてタテ軸は上側が『やりがいのある仕事』『自由に言えたり自由に振る舞える』『やってみいたいこと、やらなければならないことがあって楽しい』などはっきりした積極的意見で、下側があいまいな消極的意見と見られる。ヨコ軸は左側が「働く理由」の『積極派』、「職業選択動機」の『積極的な動機』、「職場で能力を発揮するための要件」の『育児のための休業制度』『男女の機会均等』など“自立”，右側が『子供に扶養』『現実派』など“依存”を意味する。回答は左上の積極的な自立を示すものから右下の家族への依存にと時計回りに移っている。これらより「職業人としての生活」における諸要因の関連が示された。

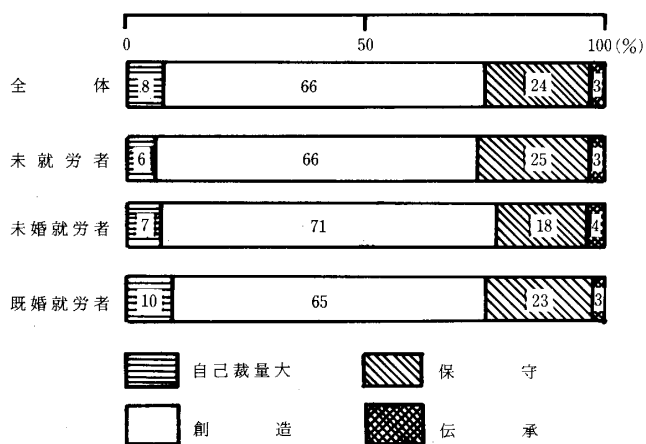


図6 家庭観の比較

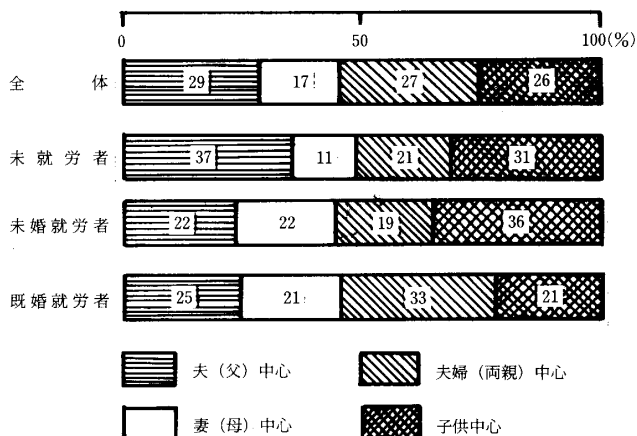


図7 家庭運営について

## 2) 人間としての生活

### (1) 家庭観

「『家庭』は女性にとってどのような場と考えているのか」を「自己裁量大」、「創造」、「保守」、「伝承」の選択肢で未就労者、未婚就労者、既婚就労者にたずねた結果を図6に示す。いずれにおいても%の者が「創造」と考えており、ついで「保守」である。これは未就労者、未婚就労者、既婚就労者の区別なく同じ結果である。

### (2) 家庭運営の状況

それぞれの家庭は誰を中心に運営されているかについての結果は図7に示す通りである。全体では『夫(父)中心』、『夫婦(両親)中心』、『子供中心』がほぼ同程度を示した。しかし「未就労者」「未婚就労者」は『子供中心』を「既婚就労者」は『夫婦(両親)中心』を示し、主観的認知の違いがみられた。

表27 家庭運営面からみた既婚者と未婚者の人間としての生活の分析

項目	区分	既婚者	未婚者
家庭のイメージ		0.2880	0.4493
家族関係		0.4663	0.4084
近隣関係		1.2129	0.6001
生活に対する不安		0.5862	0.3131
老後の生活問題		0.5632	0.5822
暮らし方の比較		0.2550	0.2171
暮らしの願望		0.8959	0.8815
所持品のこだわり		0.5098	0.4673
今後の生活		0.8303	0.4056
生き方のパターン		1.5232	1.4115
生活の力点		0.6675	1.0220

表28 家庭観からみた既婚者と未婚者の人間としての生活の分析

項目	区分	既婚者	未婚者
家庭運営		0.1530	0.0999
家族関係		0.1174	0.0128
近隣関係		0.1224	0.2060
生活に対する不安		0.1117	0.0951
老後の生活問題		0.0951	0.5171
暮らし方の比較		0.0641	0.0853
暮らしの願望		0.3884	0.2417
所持品のこだわり		0.1515	0.0768
今後の生活		0.1168	0.1244
生き方のパターン		0.4181	0.1596
生活の力点		0.4204	0.3297

(3) 家庭観  
や家庭運営か  
らみた人間と  
しての生活の  
分析

「人間とし  
ての生活」の  
中の「家庭  
観」について  
得られた結果  
を基として、  
『創造 - 伝  
承』を外的基  
準に、要因は  
表26に示す11  
アイテム57カ  
テゴリーで分  
析した。その  
結果、特に  
「生活の力  
点」,「生活の  
パターン」,  
「暮らしの願  
望」,「老後  
に対する不安」  
が『創造』に  
対する大きな  
効果要因とみ  
られる。しか  
し『他人の暮  
らし方との比  
較』は要因効  
果が小さい。  
この場合、要  
因の判別的中  
率は90.9%で  
ある。また同  
様に「家庭運  
営」の『夫婦  
中心 - 夫中  
心』を外的基  
準に同じ要因  
での分析結果  
も表26に示

表26 既婚者の家庭観・家庭運営面から人間としての生活分析

アイテム	カテゴリー	変数分析			変数分析		
		変数	レンジ	偏相関係数	変数	レンジ	偏相関係数
家庭の維持	任されるもの	-			0.2051		
	創っていくもの	-			0.0199		
	守るもの	-			-0.0829		
	入っていくもの	-	-	-	0.0007	0.2880	0.1719
仲良く 家族関係	非常に同感	-0.0132			0.0470		
	かなり同感	0.0271			-0.0451		
	どちらとも	-0.0554			-0.0773		
	余り同感しない	-0.0339			0.3890		
	全く同感しない	0.0620	0.1174	0.1607	0.2380	0.4663	0.2370
近隣関係	非常に同感	-0.0315			0.0282		
	かなり同感	-0.0037			0.0654		
	どちらとも	0.0060			-0.0532		
	余り同感しない	-0.0084			-0.2080		
	全く同感しない	0.0717	0.1224	0.0945	0.5091	1.2129	0.3174
生活する 不安	非常に同感	-0.0287			0.2286		
	かなり同感	-0.0124			0.3001		
	どちらとも	-0.0100			-0.0469		
	余り同感しない	0.0302			-0.0608		
	全く同感しない	-0.0047	0.1117	0.0840	-0.2861	0.5862	0.3987
老後 生活に不安	非常に同感	-0.0138			-0.2506		
	かなり同感	0.0320			-0.0422		
	どちらとも	0.0213			-0.0928		
	余り同感しない	-0.0460			0.1346		
	全く同感しない	-0.0051	0.0951	0.1401	0.1050	0.5632	0.2781
他方と 比較	他と違う方が個性的	0.0120			-0.1755		
	他と違うと気になる	-0.0538			0.0795		
	気にならない	0.0077			0.0083		
	わからない	-0.0148	0.0788	0.0918	0.0000	0.2550	0.1509
	贅沢な生活	-0.0170			-0.3454		
暮らしの 願望	やや贅沢な生活	0.0039			0.0057		
	人並みな生活	-0.0814			0.0095		
	質素な生活	0.0307			-0.3343		
	どうでもよい	-0.0004	0.3884	0.1487	0.5505	0.8959	0.1852
	好みをもつ	-0.004			0.0142		
所持品	特にこだわらない	0.0084			-0.0373		
	わからない	-0.1431	0.1515	0.1741	0.4725	0.5098	0.1953
	心の豊かさゆとり	0.0189			-0.0076		
	物質面の充実	0.0254			-0.1122		
	一概にはいえない	-0.0339			0.0730		
今生活 の	わからない	-0.0914	0.1168	0.1406	0.7181	0.8303	0.2727
	1型(非就業型)	-0.3433			-0.5297		
	2型(非就業型)	-0.0362			-0.1998		
	3型(再就業型)	0.0115			-0.0181		
	4型(非就業型)	-0.0093			0.0676		
生活の パターン	5型(継続就業型)	0.0114			0.0463		
	6型(ディンクス型)	0.0748			0.2213		
	7型(非結婚型)	0.0399	0.4181	0.2382	-1.3019	1.5232	0.3378
	食生活	-0.0282			-0.0936		
	衣生活	0.1539			-0.1968		
生活の 力点	耐久消費財	-0.0379			-0.0409		
	住生活	0.0130			0.0599		
	レジャー	0.0305			0.0674		
	学習活動	-0.0213			0.0527		
	貯蓄	0.0683			-0.0106		
	生活全般	-0.2665			-0.3657		
	精神的なもの	0.0991			0.3019		
	ない	0.0412	0.4204	0.2082	-0.1573	0.6675	0.2559
	夫中心	0.0087			-		
	妻中心	-0.0853			-		
家庭運営	夫婦中心	-0.0134			-		
	子供中心	0.0455	0.1530	0.2094	-	-	-

(+: 創造, -: 伝承)

(+: 夫婦中心, -: 夫中心)

す。全てにおいて大きな要因効果を示すが「生活のパターン」、『近所の人と助け合って円満な生活をしている』と感じるかの「近隣関係」が大きい。

「他人の暮らし方との比較」は『創造』を外的基準にみた「家庭観」と逆になった。このときの要因の判別率の中率は76.5%である。

「家庭観」・「家庭運営」について同じ外的基準で「未婚者」「既婚者」を比較した。その結果は表27、

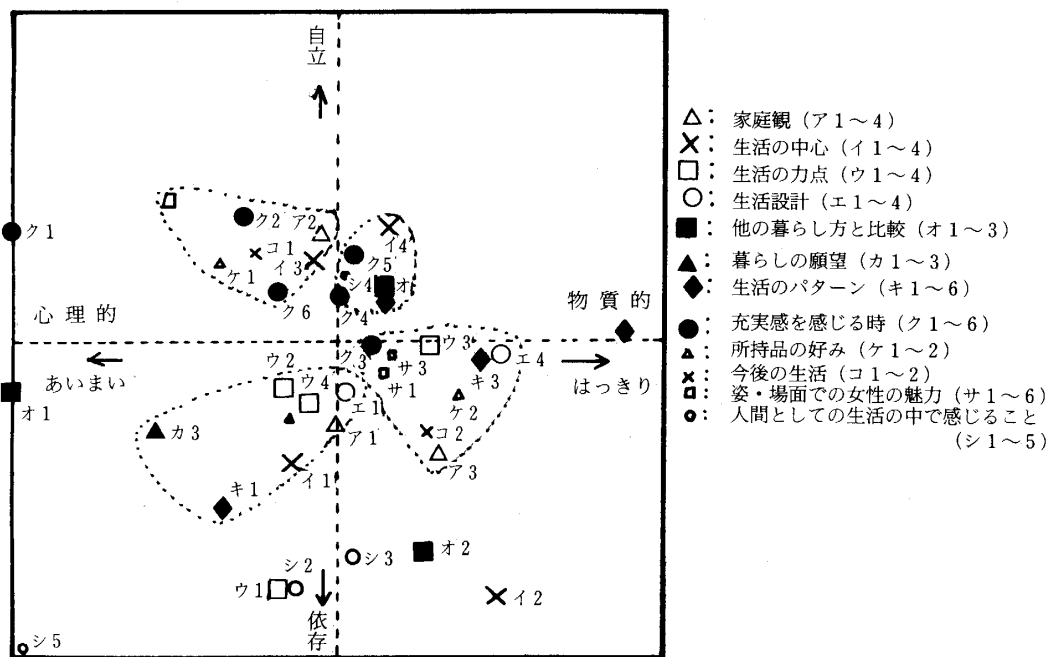


図8 既婚者の人間としての生活とライフスタイル構成要因との関連

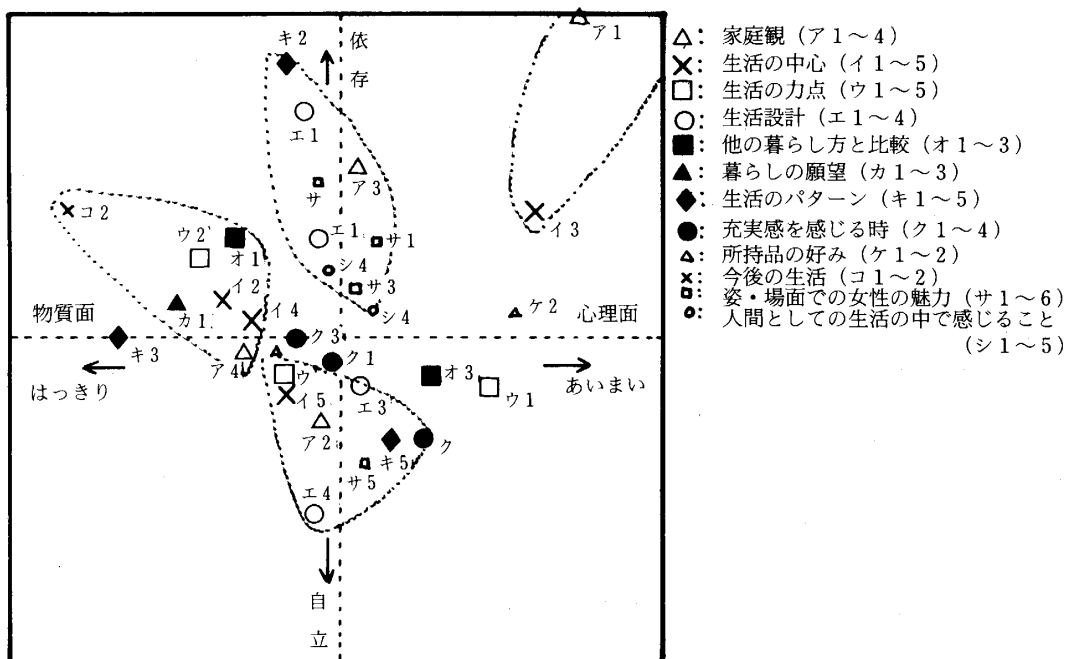


図9 未婚者の人間としての生活とライフスタイル構成要因との関連

表28に示す通りである。「家庭観」では「老後の生活問題」,「生活の力点」に,「家庭運営」では「近隣関係」,「家庭のイメージ」,「生活の力点」に差が見られた。

次に「職業人としての生活」同様にこれらの事項を総括的に捉えるために,既婚者においては12の質問項目50選択肢を取り上げ,年齢の別,生活費,年収,学歴等の属性をウェイトにして分析した。その

結果は図8に示す通りである。分析は2軸とした。タテ軸の固有値は0.1765,ヨコ軸の固有値は0.1470である。「生活のパターン」が上下にふれた。また「家庭運営」の『子供中心』の近くには「他人の暮らし方との比較」の『気にならない』,「充実感」の『友人・知人と会合,雑談している時』など安楽な志向がみられ,『妻中心』の近くは「他人の暮らし方との比較」の『違うと気になる』,「家庭観」の『保守』,「今後の生活」の『物質面の充実』

などがみられる。『夫中心』の近くでは「家庭観」の『自己裁量大』,「家族が仲良く暮らしている」,「生活設計」の『子供に扶養してもらう』など家族的志向が見られる。「夫婦中心」の近くでは「家庭観」の『創造』,「今後の生活」の『心の豊かさ』,「所持品」の『好みを持つ』,「充実感」の『趣味・スポーツに熱中している時』,「生活設計」の『貯金・退職金』など自立志向が見られる。「家庭観」の『伝承』は「生活のパターン」の『1型の非就業型』と共に大きく分化した。

なお,ヨコ軸は右側が物質面をはっきり示し,左側はあいまいな心理面が見られる。タテ軸の上側は「自立」,下側は「依存」が見られる。

つぎに未就労者についても同様に行った。この属性ではこずかい,母の職業を加え,年収,学歴を除いた。結果は図9に示す通りである。この場合も分析は2軸とした。タテ軸の固有値は0.1401,ヨコ軸の固有値は0.1337である。「家庭観」の『保守』の近くには,「女性の魅力」の『夫や男性に尽くす姿』,『家事に打ち込む姿』,「生活設計」の『子供に扶養してもらう』などがあり依存志向がみられる。「家庭観」の『伝承』の近くには,『妻中心』『親中心』,「他人の暮らしとの比較」の『違うときになる』,「生活の力点」の『衣生活』,「暮らしの願望」の『やや贅沢な生活』などがみられる。「家庭観」の『創造』の近くには,『子供中心』,『家庭を持ちつつ働く姿』,「生活設計」の『働く』,「充実感」の『勉強・教養に身を入れているとき』などがみられる。「家庭観」の『自己裁量大』の近くには,『夫婦中心』,「生活の力点」の『精神的なもの』などがみられる。

なお,ヨコ軸は右側があいまいな心理面を示し,左側ははっきりと物質面が見られる。タテ軸の上は「依存」,下は「自立」が見られる。この結果は既婚者とはまったく異なったものとなった。これは既婚者との生活経験の違いに因るものと推察されるが,今後,他の要因と検討する必要があると思われる。また生活環境,価値意識が要因と深く関わっている事実が見られた。

## 5. 総 括

女性が職場・家庭・地域において「男性の補助労働力」であるという意識は徐々に改善されつつあるが,現状においては女性自身がそれぞれの場における実態の把握と自覚を持った行動の必要性が生じて

いる。また若年層を中心として価値意識は自分主義の自己顕示志向や自立志向が拡大し,ライフスタイルは大きく変化してきた。そこで現状の女性の「職業人としての生活」と「人間としての生活」の両方を同じように扱いながら,ライフスタイル構成要因とのかかわり方,その影響などについて包括的・総括的に捉えることを目的に検討した。その結果,

1)「職業人としての生活」の職業選択動機では既婚者の $\frac{1}{3}$ が『消極的な動機』とやや多くみられたものの他の動機と分散した。しかし未就労者は『積極的な動機』が $\frac{2}{3}$ と圧倒的で『消極的な動機』は見られなかった。また就労理由について既婚者は『現実派』が過半数を占め,未就労者は『積極派』が半数を占めた。

2)ライフスタイル構成要因に対する職業選択動機の「積極-消極」,就労理由の「現実-生活設計」をそれぞれ外的基準に分析した。その結果,職業選択動機ではすべての要因が効果要因となった。とくに「生き方のパターン」「生活設計」「資格」が大きい。就労理由では「資格」「職業選択」に要因効果がみられない。就労理由で『現実-生活設計』と『積極-消極』の外的基準を比較すると『積極-消極』がすべての要因の効果要因になり,しかもその値が大きいことがわかった。これは価値観の関わりの大きさを示すものと思われる。

3)職業人としての毎日の生活をSemantic Differential法を用いて,職業選択動機や就労理由の別に比較すると職業選択動機で積極的な姿勢を示すものと就労理由の積極派はよく対応した。また総括的な分析でも諸要因の類似した選択肢が近くにみられ,ライフスタイル構成要因間の理解・把握ができた。

4)「人間としての生活」における「家庭観」では未就労者,未婚就労者,既婚就労者のいずれも $\frac{2}{3}$ が『創っていくもの』と考えている。「家庭運営」は未就労者,未婚就労者は『子供中心』に営まれているとし,既婚就労者は『夫婦中心』に営まれていると考えており,主観的認知の違いが示された。

5)ライフスタイル構成要因に対する「家庭観」の『創造-伝承』,「家庭運営」の『夫婦中心-夫中心』を外的基準に分析した。その結果,「家庭観」では「生活の力点」「生活のパターン」「暮らしの願望」「老後に対する不安」に大きな要因効果がみられ「他人の暮らしとの比較」に要因効果は見られなかった。「家庭運営」ではすべてに大きな要因効果がみられた。

また既婚者と未婚者の「家庭観」と「家庭運営」について比較した。その結果、「家庭観」では「老後の生活問題」「生活の力点」に、「家庭運営」では「近隣関係」「家庭のイメージ」「生活の力点」に差が見られた。これらから生活環境、価値意識が要因と深く関わっている事実がみられた。また人間としての生活を総括的に捉えると諸要因の説明変数において既婚者と未婚者でまったく異なった結果となった。

これらよりライフスタイルの構成要因が「人間としての生活」や「職業人としての生活」の中で主観的知覚や認知の部分における価値観の特性や生活目標と深く関わっていることがわかった。

今後、他の要因からの接近も含めて総合的に検討し報告したいと考えている。

#### 【付記】

この調査においてお忙しい中お世話くださった自治研修所 長谷川清助教授、社会教育主事 大西節子氏、福祉部 細田裕子氏、富田真智子氏、安達美智子氏、島根県婦人連合会 藤原ヒサヨ氏、農協中央会 周藤邦子氏、看護学院 小中綾子氏、川上澄子氏、内村久子氏の各氏、その他各方面の方々、調査に快く応じてくださった方々に衷心より感謝の意を表します。また、集計操作に協力いただいた本学卒業生 梶谷江美子氏に感謝申し上げます。

本研究を進めるにあたりご懇切なご指導をいただきました横浜国立大学 三東純子教授に厚く御礼申し上げます。

#### 参 考 文 献

- 1) 総務庁統計局：労働力調査，昭和45～昭和63年，大蔵省印刷局
- 2) 文部省：学校基本調査，平成元年
- 3) 労働省：昭和61年度女子労働者の雇用管理に関する調査，昭和62年，大蔵省印刷局
- 4) 中小企業庁小規模企業部サービス業振興室：余暇関連サービスとそのコミュニティ形成機能に関する研究調査，昭和58年
- 5) 総務庁統計局：就業構造基本調査報告Ⅱ，昭和62年
- 6) 村田昭治，他：ライフスタイル発想法，ダイヤモンド社，P 53（1975）
- 7) 中川早苗：家政誌，32，10（1981）
- 8) 村田昭治，他：ライフスタイル全書，ダイヤモンド社，P 15（1979）
- 9) 米山俊直：生活学第9，ドメス出版，P 11（1983）
- 10) 直井道子編：家事の社会学，サイエンス社，P 5（1989）
- 11) 経済企画庁国民生活局編：新しい女性の生き方を求めて，大蔵省印刷局，P 38（昭和62年）
- 12) 林知己夫監修：数量化理論とデータ処理，朝倉書店，P 49～P 136（1988）
- 13) 河野友信：ストレスの科学と健康，朝倉書店，P 3（1988）
- 14) 生命保険文化センター編：自分主義の時代，東洋経済新報社，P 24～P 25（昭和63年）

（平成2年10月30日受理）